

世界のトップアスリートが信頼を置く競技用車いす 手に入りやすくすることで、車いすスポーツの 普及を目指す

競技用車いすを手がけるオーエックスエンジニアリング。創業者が車いす生活となったことをきっかけに、オートバイ販売店から車いす事業へと転換。競技に関わる喜びとやりがいを感じ、競技用車いすを開発、数々のメダル獲得に貢献している。競技レベルに関係なく、一人ひとりの選手にとってのベストな競技用車いすを提供すべく努力を重ねている。



株式会社オーエックスエンジニアリング



オートバイから車いすへ、事業を転換



競技用車いすと向き合う

同社がオートバイ販売から車いす事業に転換したのは、創立者である故・石井重行が1984年に新型車の試乗中に事故で脊髄損傷を負い、車いす生活となったのがきっかけである。乗り物好きのアクティブ派らしく自分にぴったりの車いすを求めて次々と乗り換えていった。しかし、デザイン面でも機能面でも、なかなかこれとい



観戦会



体験会・講習会



ボランティア



協賛



技術支援・
製品開発

企業情報

株式会社オーエックスエンジニアリング

【住所】千葉県千葉市若葉区中田町2186-1

【電話】043-228-0777(代表)

【URL】<http://www.oxgroup.co.jp/>



う一台と巡り合えなかった。無いならば、作ればいい。そう考えた石井前社長は、オートバイの販売を続けながら、自社の工作機械を使い、自分工の車いすの製作を始めた。



ひとつひとつ丁寧な仕事を行っている

そして1990年、ドイツで開催されたオートバイの展示会を訪れた際、現地の記者からお手製の車いすを称賛されたのを機に、事業転換を決意した。

競技用車いすに取り組み、数々のメダル獲得に貢献

同社は車いす業界全体から見れば、後発なので、最初からターゲットを絞り、乗りたくなる、出かけたくなる車いすを目指し、オーダーメイドで提供することとした。機能やデザインにもこだわった。

また、これと同時に競技用車いすを手掛けることも決めた。



選手からのフィードバックを聞く

当時、パラスポーツについての知識は皆無だったが、パラスポーツ界のレジェンド、星義輝氏らの依頼を受けて、4輪型のテニス車の開発に着手。同時に、形が似ているバスケットボール車の開発にも着手した。

1994年からは陸上用車いす(レーサー)の開発にも乗り出し、短距離ランナーの敵(うね)康弘選手を社員に迎え入れて開発。敵選手は、1996年に陸上男子200m(T52)にて、世界新記録で金メダルを獲得。当時、米国製レーサーが主流だった陸上界において、初めて日本車が金メダルを獲得することにより、同社の名を広く知らしめることとなった。

以後、同社はサポート契約を結んだ国内外の選手たちに競技用車いすを提供。

「選手の皆さんに当社の車いすを使っていただき、その使用感や世界の動向をフィードバックしていただく。それを反映してまた次の開発に活かす。この繰り返しで現在につながっていますし、多くの選手が活躍していただくことで、当社の製品を知っていただく機会も増えていくと思います。」と、広報室の櫻田太郎氏は語る。

車いすスポーツをもっと多くの方に楽しんでいただくために

同社の競技用車いすの特徴の一つは、トップアスリート用もパラスポーツ愛好家用も同じ材料、同じ製造工程で作られていることにある。

多くの選手に使用いただけるよう、設計を工夫し価格を抑える努力をしている。そこには、車いすスポーツをもっと盛り上げたいという想いが込められている。



櫻田氏

近年、たしかにパラスポーツは注目されるようになったが、もっとスポーツを始める車いすユーザーが増えて欲しいと考えている。次世代の育成も重要であることから、同社では、子どもたちがもっと気軽にスポーツや遊びを楽しめるようにと、楽に動けて、ターンもしやすいキッズモデルも発売。

さらに、同社ではバドミントン用の車いすも開発、同種目の2選手を含む34選手をサポートしている。同社の技術が詰まった競技用車いすを選手たちがどのように操作し戦っているか、今後、観戦をする際には、そんなところに注目してみるのも面白いかもしれない。

コロナ禍における取組・今後の方向性

コロナ禍においてもアスリートは新たな取組や改善を行っている。社としてもアスリートが抱えている課題や要望に迅速に対応するとともに、競技力向上につながる研究開発を継続していく。また、各地のパラスポーツ体験会などへ車いすの貸出を行い、パラスポーツの理解啓発にも協力していく。